

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	櫛木温泉句三昧 : 文苑
Author(s)	瓢郎; 紅鱒; 岸三; 李王; 戦車; 不割石; 巨足; 桔槔
Citation	龍南會雜誌, 120: 81-84
Issue date	1907
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6028">http://hdl.handle.net/2298/6028</a>
Right	

春の風もゆる腫と花の頬の君よりふきぬ時めく胸に  
春の磯うくほどよみて浪ちりぬ沖なる船を見てある人に  
青葉若葉見る目すゞき初夏のあけぼの野を美しと見る  
高嘶くや阿蘇の御牧を震はして東へ驅けぬ若駒五百

櫛本温泉句三昧

三月廿九日

桶の底の浮へるに落つ椿哉 瓢郎  
春の水わかれて草の中に入る 紅鱒

三十日

崖の岩下滴りや水草生ふ 岸三  
甕に引く笥に李散りに鼻 瓢郎  
湯の樋の湯氣滴りて木の芽吹く 全

三十一日

雨の夜遅く戦車李王来る。  
山の湖畑ありて鳴く雲雀かな 李王  
網二重雲雀の籠を吊しけり 紅鱒  
梨の花棚にのびたる若き枝 全

四月一日

揚雲雀砂に植ゑたる菜蓂の列 全  
群生の土筆や射朶の古き酌 岸三  
大樫の下に梨花あり羊小屋 全  
狗脊や半ば開きく雑木山 瓢郎

溜水池廻りて低き椿かゝ 戦車  
材木を迂らす峽の椿かな 全  
社の前の濕める芝生や五形花咲 全  
湯の小屋と崖の間や落椿 李王  
樹々浸す潭や椿の落ちる 全  
朝風呂や目に近きもの小米花 岸三  
庭園の芝生に銀杏葎す 全  
若草や剝げて落ちたる藏の壁 全

文

石垣に根太き椿紅まだら  
 輪の取れし桶に植ゑ鳧白躑躅  
 木蓮や石菖の根に吹かれ寄る  
 葉は刈りて束ねぬ畑開き  
 枝の先一つ木蓮の蕾かな  
 全 全 全 全 紅 紅  
 岸三 瓢郎 瓢郎 瓢郎 鱒 鱒

二 日

砂堀れは水湧く濱の杉菜哉  
 上り蠶を灯に透かす選り分る  
 繁縷や花壇に枇杷の自然生へ  
 菊若葉芽を食ふ虫を水に掃く  
 虎杖の葉裏に虫の袋かあ  
 田の杉菜草履の裏に土あつし  
 藏引きし跡一面の杉菜かあ  
 鍋を研ぐ鉋丁に蜂を追ひに鳧  
 韭畑や鯛の尾はりし流しの戸  
 繁縷や田川の畔の樋枕  
 蛇唸る草山低し庭の中  
 菊若葉竹に仕切りし花壇哉  
 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全  
 岸三 岸三 岸三 岸三 岸三 岸三 岸三 岸三 岸三 岸三 岸三

三 日

木爪の鉢五色の貝を撒きに鳧  
 鹿孕み尾上の櫻散り盡す  
 蒲公英や豆腐漉したる帛を干す  
 囀りや煙艸に煙る室開ける  
 沖の岩雨に釣れけり櫻鯛  
 燕の糞たらされぬ越後獅子  
 松の花小松の多き砂地哉  
 提灯で數へてせるや櫻鯛  
 砂のつく目荒らき籠や櫻鯛  
 春蘭の花やぬれたる砂の落つ  
 石燈籠油に散れる松の花  
 春蘭や芽の無き木々に青き苔  
 椎茸を乾す竹筵松の花  
 土たまる塀の瓦や花薺  
 蒲公英の芝に車の痕深し  
 囀りや金竹の藪川を蔽ふ  
 全  
 岸三

四 日

女

嘲りや蛤横に舌を出す 紅鱗

桃の宿湯に足そぐ泊かな 全

山の皴廣く末黒の芒哉 全

種子藏に吊りし穂黍や桃の花 岸三

青塚に一株萩の若葉哉 全

蛤や紫古き羊齒の籠 全 戰車

桃咲くや春の河鹿をさく小村 全

色褪せて樹脂ある桃の落花かな 全 瓢郎

大船を圍ふ藁屋根桃の花 全

並べ繋ぐ鹽積馬や花薊 全 李王

叢に泥水たまる薊かち 全

壘につめて鑛泉賣るや桃の花 全

山の宿廠ほす日や桃の散る 全

蛤鍋の看板横に鰻提灯 全

蛤鍋の七輪あふぐ我火哉 全

五日

花大根馬車に一駄の乾魚哉 岸三

口そぐ樹下の流や蛇の聲 瓢郎

蕙あむ檜の木獨樂や花大根 全

割竹の圓き埒ある櫻哉 全

庭せまく葛乾す日和蛇のとぶ 李王

炮烙に煮胡麻煙る夏近し 全

山の柴刈り盡されて夏近し 全

畑匍ふ辨慶蟹や花大根 全

尾張村に銀行あるや花大根 全

(南禪寺)

山吹や煉瓦にたぐむ渠高し 戰車

筆賣の役場まわりや花大根 全

瓦盆廢蓋結ぶ契や花大根 全

繪乞食の瓢箪畫くや櫻散る 全

耳樽の耳持つて舞ふ櫻かな 全

天水の大きな釜や櫻散る 全

行春や酒に酔ふ人日に歩りく 全

福州の泣學校や暮の春 全

植ゑかへの櫻を起す人数哉 紅鱗

親猿の櫻に上る後向き 全

死

大男白こかし行く落花哉 全

六 日

鷹賣りの脂に大籠や稗袋 岸三

店の奥綿ふみ居れば鷹の琴 李王

下げて行く月琴鳴るや海棠花 紅鯨

節折つて湯をとほしけり蓮若根 瓢郎

三月三日例會(箕踞洞)運座一回作者九人選者九人李王二十八点、紅鯨瓢郎二十一点、戰車十三点、不割石九点、番外巨足十六点以下畧以下畧

轉りやあけ放ちたる佛の間 李王

曲水に折からの落花夕日かな 全

轉りや重れて温き小鳥籠 全

曲水や七歩の才の矢繼速 紅 轉

轉りや松笠多き松の枝 全

飯蛸の頭にかけし酢味噌哉 全

轉りや砲臺の道松まばら 瓢郎

人の手によりて青きを踏む子哉 全

齒の点に頬髻剃りぬ二日灸 全

濱廣う飯蛸ついて廻りけり 戰車

二日灸臍下にすねて力みけり 全

開山忌夜に入る寺や雁歸る 不割石

轉りや帆木綿を干す浦の家 巨足

土鍋冷めてわびしき宵を雁歸る 全

曲水や階近き桃の枝 岸三

轉りや僧房の朝静かなり 結 檉